

I. 主題と説述 thème et propos

杉 山 正 樹

はじめに

Ce n'est pas ici qu'il habite.

彼が住んでいるのは、ここではない。

Ce n'est pas moi qui ai fait cela.

それをしたのは、僕ではない。

これらの例文は、それぞれ

Il n'habite pas ici.

Je n'ai pas fait cela.

という文中にある太字の要素を抽出し、*c'est* と *que* (*qui*) のあいだに挿入して、それを強調する構文で、一般に *c'est ... que* (*qui*) 〜 の強調構文は「〜するのは…である」と訳せばよいとされている。

しかし次の例文

Ce n'est pas parce que je suis libre que je ne fais plus rien.

(J. et G. CAPELLE : *La France en direct*, p. 176)

を、「僕がなにもしなくなったのは、自由の身になったからではない」と訳したら正しい意味を伝えられず、「自由になったからといって、何もしなくなったわけではない」と訳さねばならない。これはなぜか？ これが

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

この論文の出発点である。

なお、この論文のなかで日本語の訳文のことも問題にしているのは、日本人がフランス語のように構文のひどく違う言葉を理解しようとするとき、意識すると否とにかかわらず、フランス語の原文と日本語訳文との比較・検討をしないではすまされないと思うからである。

発話分析の三つのレベル

ある発話⁽¹⁾の構造を分析するには、1) 文法的 (あるいは統辞的) grammatical (ou syntaxique), 2) 論理的 logique, 3) 心理的 psychologique の三つの視点が必要である。⁽²⁾

- 1) 文法的レベルでなされる分析とは、伝統文法による、主語+動詞+目的補語+状況補語 (主語+述部) といった分析の仕方を指し、
- 2) 論理的レベルの分析とは、非人称構文や受動態に見られる、形式的な文法的主語と論理的主語、あるいは能動的動作の主体といった分析の仕方であり、
- 3) 心理的レベルの分析とは、ある文で、話し手が心理的に何を話題の中心に置いているか (心理的主語 sujet psychologique), その話題についてどう述べているか (心理的述部 prédicat psychologique) を中心にした分析の仕方である。

Ce cadeau, je l'ai reçu hier de Marie.

この贈り物は、マリさんから昨日もらいました。

この文で、文法的主語は je であり、l'ai reçu de Marie hier がその述部⁽³⁾である。

論理的主語は、Marie (donner「与える」という能動的行為をした人) である。

心理的主語は、文の「主題」thème になっている ce cadeau であり、心理的述部は、je l'ai reçu hier de Marie. の全体である。つまり「主題」

について述べられていることで、これを「説述(部)」propos⁽⁴⁾という。

	Ce cadeau, je l'a reçu de Marie.			
文法的レベル	<u>同格補語</u>	<u>主語</u>	<u>述</u>	<u>部</u>
論理的レベル				<u>主</u> <u>語</u>
心理的レベル	<u>主</u> <u>題</u>	<u>説</u>	<u>述</u>	<u>部</u>

主題と説述 thème et propos

「主題」thème とは、話し手がこれから言わんとする事柄の中心になる題目を指す。「説述」は、これに対し、話し手がその主題に関連して述べている事柄である。

実際の日常的言語では、「主題」が言葉で表されるとは限らない。例えば、美しい絵を前にして、

Formidable! すばらしい!

と叫んだとすれば、これは発話者がその絵を見て感動し、聴者(発話者と同一であることもある)に共感を求めているのである。この場合、絵を見るというシチュエーションそのものが「主題」であり、それについて述べた Formidable! が「説述」である。

このように、発話の中心になる「主題」については、対話者間に共通の了解が成り立っていなければならない。いったん、そのような「主題」を提示すれば、話し手はそれについて何を言っても構わない。しかし、それは聴き手に一番伝えたい情報のはずである。したがって、「主題」は聴き手にとって既知の情報、「説述」は未知の新情報ということができる⁽⁵⁾。

共通の既知情報を手がかりにして、相手に新情報を伝えるのは、ごく自然のことである。統辞形式として、既知情報+未知情報の組み合わせが多いのも当然のことといえる。もちろん、相手に伝えたい情報を真っ先に言って、後から主題を説明的につけ加える、未知情報 → 既知情報の組み合わせもある。また、日常会話などではままあることだが、既知情報+既知情報の組み合わせは、聴き手に何の情報も提供しない無駄口であり、意味

がない。この他に、新情報ばかりで主題のない発話もある。

主題のない中立発話

上掲の例文から主題を取り去って、新情報だけを伝える中立叙述の文にすると、次のようになる。

J'ai reçu hier un cadeau de Marie.

昨日マリさんから贈り物をもらいました。

新情報だけを伝える中立発話では、「贈り物をもらった」ということも未知のことだから、cadeauに指示形容詞ceは付かない。ただし、目の前のテーブルに贈り物が置いてあって、それを指さしながら発話するような場合は別である。

文法的主語 je を訳出しなかったのは、実際にこの文を発話するとき、je が話し手をさしていることは、聴き手にはもちろん、その場にいるすべての人にわかっているからである。現代の英語、フランス語、ドイツ語などでは、(命令文を除いて)主語がなければ文でないといわれているので、日本語でも主語がないと落ち着かないような気分になるが、日本語なら人称代名詞の一人称の場合は謙譲表現を、二人称には尊敬表現や、呼び名、肩書きなどを使って、主語を省略するほうが普通である⁽⁶⁾。三人称にしても「彼」「彼女」という翻訳調の代名詞は、特別の意味を表す場合を除いて、一般には使われず、呼び名、役職名、あるいは「あの人」「あの子」といった別の言葉で置き換えられることが多い⁽⁷⁾。蛇足ではあるが、イタリア語では動詞の語尾で人称の区別がつくので、主語人称代名詞は、強調でなければ、使われない。

そもそも、フランス語の人称代名詞は、命令形動詞の補語として後置されるか、強勢形で使われるのでなければ、どんな格に置かれても、アクセントを受けることがない。主語、あるいは直接目的補語、あるいは間接目的補語の人称・数、時には性を表示する小辞として動詞につけられ、動詞と一体となって一つの意味グループを形成しているのであるから、それだ

けで独立した機能を果たすことはない。一人称であれば、話者を、二人称であれば、聴者を表していることは自明の理であるが、三人称であっても、代名詞という性質上、それは聴者との間にすでに了解が成立しているものである。上掲の例文中の *j'ai reçu* の *j'* に通常の強勢アクセントはもちろんのこと、表現アクセント(後述)も置くことはできない。

いずれにしても、上記の例文を発話するとき、途中に切れ目を置くことをせず、音声は上昇した後、文の終わりを告げる下降メロディーを描いて休止する。このような文を、連結文 (*phrase liée*)⁽⁸⁾ という。

主題化 *thématisation*

実際に目の前にある贈り物を指さしながら話すのであるなら、話題の中心が贈り物になることを聴き手に予告するため、まず *ce cadeau* を先頭に立てるのが自然であろう。これが「主題」である。「主題」を明確にした後で、「それはマリさんからもらったものです」という、話し手がもっとも言いたいこと、聴き手にいちばん伝えたいことを言って文を終える。この部分が「説述(部)」である。「説述(部)」では、文頭に取り出した *ce cadeau* を、代名詞 *le* で再現し、その統辞上の機能⁽⁹⁾を明示する。

Ce cadeau, je l'ai reçu hier de Marie.

この贈り物は、昨日マリさんからもらいました。

「主題」を先頭に置くのは、話し手が心のなかで、

Ce cadeau ? Vous me demandez de qui il vient?

この贈り物? これは誰からもらったのかと訊いているのですか?

という、聴き手に対して発する質問を想定し、*Vous me demandez de qui il vient?* の部分を省略し、その代わりにその答を発話するからにほかならない。その答の部分が「説述」である。

実際にこれを発話するときには、*ce cadeau* が質問に特有の上昇メロディーで発音され、その後に音声の切れ目を置き、その後あらためて *je l'ai reçu hier de Marie.* を平叙文のイントネーションで続けることになる。

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

このように、途中で音声の切れ目がある文を、「分割文」(phrase segmentée)⁽¹⁰⁾という。

「主題」は、ce cadeau に限ったわけではなく、動詞を除く⁽¹¹⁾すべての辞項⁽¹²⁾について可能である。

例えば、「わたし」を話題の中心にもってきなければ、

Moi, j'ai reçu hier ce cadeau de Marie.

僕は、昨日この贈り物をマリさんからもらいました。

とすれば、moi が「主題」となる。この場合の想定質問は、

Moi? Vous me demandez ce que j'ai fait hier ?

僕のこと? 僕が昨日なにをしたのかと訊いているのですか?

である。これに答える j'ai reçu hier ce cadeau de Marie. 「昨日マリさんからこの贈り物をもらいました」が「説述」になる。

「マリさん」が聴き手にとって既知の人物であれば、これを「主題」にすることができる。この場合、Marie だけを純粹に「主題」に取り上げて文頭に置くと、後続の「説述部」で Marie が果たす機能を明確にするため、Marie を受ける人称代名詞に de をつけて復元しなければならない。

Marie, j'ai reçu hier ce cadeau d'elle.

マリさんなら、僕は昨日この贈り物をもらいました。

この時の想定質問は、次のようになる。

Marie? Vous me demandez ce qu'elle a fait hier?

マリさんのことですか? マリさんが昨日どうしたかと訊いているのですか?

しかし、De Marie というように、機能表示を明確にしている辞項を先頭に持ってくれば、必ずしも代名詞を使って復元する必要はなくなる(復元することもある)。

De Marie, j'ai reçu hier ce cadeau.

マリさんからは、昨日この贈り物をもらいました。

この時の想定質問は、次のようになる。

(Et) De Marie? Vous voulez des nouvelles?

マリさんのこと? 彼女の消息を知りたいのですか?

いずれにしても、話し手が聴き手にいちばん伝えたいのは、「昨日この贈り物をもらった」という「説述部」である。

さらに hier を「主題」にするなら、それを文頭に出せばよい。

Hier, j'ai reçu ce cadeau de Marie.

昨日なら、この贈り物をマリさんからもらいました。

この時の想定質問は、次のとおりである。

Hier? Tu me demandes ce qui s'est passé hier?

昨日って? 昨日何があったか訊いているんですか?

いずれにしても、何かを「主題」に選定したということは、広い意味での文脈のなかで、その何かが新情報でなくなっているということである。

左方転位⁽¹³⁾

このように、「主題」として取り上げられた語(群)は、文頭、つまり文の左方に移転されることによって「主題」であることを明らかにしている。すでに述べたように、何か新しい情報を伝達しようとする場合、聴き手が知っている情報を手がかりにするのが自然である。したがって、文を構成する要素は、既知情報から新情報へと並べられる。

例えば、Il y a des fleurs sur la table. という文は、「何かがテーブルの上にある」ことはわかっているが、「それが何であるか」がわからないときの答えであり、ここでも既知情報 il y a (ある) が先頭に置かれ、未知情報 des fleurs (花) はその後に位置する。これとは逆に、「花がある」ことはわかっているが、「それがどこにあるか」を知らないときの答えとしては、Les fleurs sont sur la table. といわねばならない。今度は「花」les fleurs が既知情報で、「テーブルの上にある」sont sur la table は新情報だからである。

たいていの場合、主語が旧情報の担い手になるので、主語(旧情報)→

1. 主題と説述 thème et propos (杉山)

述部(新情報)の語順になるのは、論理にかなっている。ただし、ここでの「主語」は、非人称構文の主語を除いて、述部にある動詞が表現する行為、過程、状態の主体を表す語であって、「主題」になるとは限らない。

通常の論理的語順で、主語が先頭にあれば、それだけで「主題」になる資格がありそうに思えるが、人称代名詞主語の場合には動詞の一部になっているので、「主題」にしようとするれば、その語を特に取り出し、左方転位によって文頭に持ってこなくてはならない。主語にせよ、あるいはそれ以外の要素にせよ、文頭に置かれるのが代名詞であれば、アクセントを受けられる強調形(=名詞形)に直さなければならない。これは旧情報である「主題」の強調である。

Il a acheté ce livre.

(彼が)この本を買いました。(主題なしの中立叙述)

Lui, il a acheté ce livre.

彼は、この本を買いました。(主題は lui)

「～は」と「～が」

日本語では、係助詞「～は」が「主題」を明らかにする役割を果たしていることが多く、「～が」はだいたい主格を表す格助詞である。このことについては、すでに定説になっているようである。フランス語学者の川本茂雄氏も、フランス語の「主題」と日本語の係助詞「は」、フランス語の強調構文 *c'est ... qui* ～と日本語の格助詞「が」についての論文を多数発表している。⁽¹⁴⁾

次に、国語学者三上章氏の『日本語の論理』から、少し長くなるが、関係のある箇所を引用しておく。

「は」は主題を提示する助詞、すなわち提題の助詞である。「～は」は、「～について言えば」の心である。この提題という規定から、「は」の文法の大半を導き出すことができる。(中略)

「～は」が「～が」を兼務している時、「～は」は主題である主格、「～が」は主題ではないただの主格である。(中略)

私が理事長です。

理事長は私です。

のように、「が」の文が「は」を内蔵していることがある。このような「が」を強声的(＝強調的)になっている、と言うことにする。そこに発声上の強勢を与えたのと似た効果を持っているからである。

「～について言えば」の「～」は、

- 1) 何を指しているか明らかなもの、すなわち相手にとって既知のものでなければならない。

それゆえ、疑問詞がいけないことは明らかである。

これは何だ？

* 何はあるか？ (*は非文法的な文を指す)

- 2) 次に不定なものも不適當。「花は」と言ったら,
 - a) 場面や文脈で特定の花を指していることがわかって
いる場合か、
 - b) 花の一般論を始める場合かである。

昔、ある村里に正直なおじいさんがいました。おじいさんは一匹の犬を...

このように紹介の手続きをとらねばならない。そして、「かくかくしかじかの～は」とすれば、そこで既知と認められることになる。⁽¹⁵⁾

このように、「主題」は既知の情報であって、「～は」で表され、新情報を主語に置くときには、「～が」を使わねばならない。

したがって、例えば、誰が理事長であることを知らない人が「理事長はどなたでしょうか」(Qui est le président du conseil d'administration?)と尋ね

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

たとする。つまり理事長なる人物がいることは既知の情報であり、それが誰か(新情報)を知りたがっているわけである。そこに理事長がいたとして、

理事長は 私です。

(既知情報+新情報)

Le président du conseil d'administration, c'est moi.

と答えれば、既知の情報を主題(～は)に置いて、新情報を与えることになるので自然である。しかし、

私が 理事長です。

(新情報+既知情報)

C'est moi qui suis le président du conseil d'administration.

と答えることもできる。こうであれば、「私」は新情報なので「～が」としなければならぬことの他に、旧情報→新情報という普通の心理的順序に逆らって、未知の情報を真っ先に出すことによって強調効果もあげている。ただしこの場合、日本語では素直に新情報に「が」をつけて文頭に持ってくればよいが、フランス語では、文頭に新情報を持つてくることはできないという法則に縛られ、c'est ... qui ～の提示構文を使って、moi が ce (旧情報とみなされる)の「説術」であることを、文形式として明示しなければならない。

もう一つ重要と思われることは、日本語では主題を「～なら」で表すこともできる、という三上氏の指摘である。このことについても、引用をしておこう。

発言を表す「と言う」とほとんど陳述だけを表す「である」とは言葉使いの根本に関する用言であって、この二つを係りにしたもののはかなり重要な意義がある。

平次と言えは相当怠け者だね。

平次ったら相当怠け者だね。

平次って相当怠け者だね。

平次だって (デアッテモの縮小形?) 相当怠け者だね。

平次なら相当怠け者だね。

などに、しだいに主題の提示に近づく傾向が見られよう。(中略)

取り分け重要なのは「である」の仮定形「であれば」の「なら」である。それも「甲が乙なら」と正当な仮定法として使われる場合でなく、発言のムウドとしての「なら」の用法である。

平次なら相当怠け者だよ。

平次は相当怠け者だ。

の違いはほとんど紙一重と言ってよい。前者は相手からの主題の受け取りであり、後者はもっぱら話し手のものとしての主題の提示である。

相手の意図を汲む遠慮が仮定形の「なら」であり、遠慮を止めると、活用も消えて「は」に落ち着く。

半 仮 定 法 —— あなたが何々を問題にされるなら、しかじ
かと答えよう。

→ 何々なら、しかじか。

主題提示法 —— 私が何々を主題にして言えば、しかじかと
言えよう。

→ 何々は、しかじか。

提示法の結びが言い切りでありさえすれば、どんな活用形でも差し支えない。

係り結びの用言が消えた場合の係りが発言のムウドである。もう一步約束的になって、係りからも活用形が消えたのは「何々は」である。歴史的にこういう順序を踏んだわけではないが、このように提示法を発言のムウドの極限と見る仮説を立てると、語法の説明が簡単にゆく。⁽¹⁶⁾

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

これは、Charles BALLY が「たとえ主題が名詞辞項ひとつから成り立っているに過ぎなくても、その主題は、名詞辞項がその一部をなしている従属節と論理的に等価である」⁽¹⁷⁾としているのと、軌を一にしている。

右方転位⁽¹⁸⁾

前述の左方転位が、旧情報を文頭に持って来て、論理を組み立ててゆく手段とすれば、これはその逆で、新情報、つまり一番聴き手に伝えたい情報を先に言ってしまって、その後から、いま伝えたのは「～について述べたのですよ」と主題を確認させるやり方である。H. BONNARD は、左方転位によって文頭に出された要素を「先行補語」complément d'anticipation、右方転位によって文末に移動された要素を「再現補語」complément de reprise と呼んで、次のような例文を挙げて説明している。

Des billes, j'en ai.

ビー玉なら、(僕が)持っているよ。

このように、先行補語 des billes には表現力があり、

J'en ai, des billes.

持っているよ、ビー玉なら。

後置の再現補語には説明力がある⁽¹⁹⁾、と。

Ch. BALLY はこのことを、「後置の主題は、先行する文の意味を後から説明する説明的等位節から生まれたが、(中略)それはもう単なる付け足ではなく、遅れてやって来た主題である」⁽²⁰⁾と言っている。

「説述」となる先行する文は、常に独立文の形態をしていなければならないので、後から出てくる「主題」はその説述文中で代名詞、代名詞的副詞(en, y)となって、統辞的に先行文を完成させる。この結果、動詞のまわりは代名詞だけになるので、動詞そのものが強調されるという効果もある。前に挙げた例文を使って、今度は「後置の主題」を含む文を作ってみよう。

Je l'ai reçu hier de Marie, ce cadeau.

マリさんから昨日もらいました、この贈り物は。

J'ai reçu hier ce cadeau de Marie, moi

マリさんから昨日この贈り物をもらいました、僕は。

J'ai reçu ce cadeau hier (d'elle), de Marie.

この贈り物を昨日もらいました、マリさんから。

J'ai reçu ce cadeau de Marie, hier.

マリさんからこの贈り物をもらいました、昨日。

このうち、三番目と四番目の文は、「主題」として抜き出した辞項を削除しても、統辞的には完全な文になるので、「念を入れるために付け足した説明」という感じは否めない。次の文の括弧の中が省略されたと見るべきであろう。

J'ai reçu ce cadeau hier ; (j'ajoute : je l'ai reçu) de Marie.

J'ai reçu ce cadeau de Marie ; (j'ajoute : je l'ai reçu) hier.

統辞アクセント accent syntaxique (リズム・アクセントまたは強さアクセント **accent dit aussi rythmique ou tonique**)⁽²¹⁾

発話は、けっきょく連続する音連鎖から成り立っている。その音連鎖のなかで、最小の意味のまとまりを作る語(群)の最終音節に置かれるアクセントが、強さによるアクセントである。ある音節が強く発音されれば、長く伸ばされることにもなる。したがって、この「強さアクセント」は、音声の強さと長さによって意味単位の終わりに標識を付ける機能を持っている。この意味単位を「リズム・グループ」という。それが結局、文の統辞構造上の切れ目を表し、また文のリズム構造の基礎になるので、「統辞アクセント」あるいは「リズム・アクセント」といわれる。

Cette solution est impossible.

この解決法は不可能である。

この文では、弱い主題 *cette solution* と、説述部の *est impossible* の最

終音節に強勢が置かれ、両者の境界を表示している。

表現アクセント **accent expressif**⁽²²⁾

表現アクセントと呼ばれるものには二種類がある。

1) 知的アクセント (**accent intellectuel**) は、対比・対立を浮き彫りにして、単語を強調する。このアクセントは、強調しようとする語の最初の音節に置かれる「強さアクセント」である。

Cette solution n'est pas **possible**, mais **impossible**.

この解決法は可能ではなく、不可能である。

2) 感情アクセント (**accent affectif**) は、感情的反応によって語の密度を高め、話者の心的態度を強調する。このアクセントは、語の最初の音に置かれる「高さアクセント+長さアクセント」である。

Cette solution est **impossible!** = Cette solution est absolument impossible.

この解決法は不可能である。=この解決法は絶対に不可能である。

イントネーション **intonation**

発話は、アクセントによる意味単位の境界表示のほかに、音調、つまりイントネーションによって境界表示を行うこともある。

Nous étions au jardin lorsque l'orage éclata.

これは、文形式の上では、主節と従属節からなる連続文である。しかし、実際には、二つの解釈が可能である。

1) 音声途中で途切れることなく平叙文のイントネーション曲線を描いて終われば、主節にある半過去は、従属節の単純過去で表される行為が実現されるときシチュエーションを示す。つまり例文であれば、「我々が庭にいた」がいちばん伝えたい情報、つまり説述になる。

Nous étions au jardin lorsque l'orage éclata.

(説述, 新情報)

(主題, 旧情報)

雷鳴とともに俄か雨が降り始めたとき、我々は庭にいた。

- 2) しかし、*nous étions au jardin* の部分を尻上がりで発音し、その後、音声の休止を置き、残りを通常の平叙文のイントネーション曲線で終わらせれば、「主題＋説述」の分割文になり、表面上、従属節に見える「雷鳴とともに俄か雨が降り始めた」の部分が新情報を提供する説述になる。

Nous étions au jardin lorsque l'orage éclata.

(主題、旧情報)

(説述、新情報)

我々が庭にいと、雷鳴とともに俄か雨が降り始めた。⁽²³⁾

このように、イントネーションには主題と説述の境界表示の機能がある。

文型の分類

文中の一部を主題化するとき、抽出や句読点で標識をつけられたテキストと、そうでないテキストを区別する必要がある。主題化の統辞的標識は、抽出した語(群)を通常的位置からずらせたり、それを代名詞で再現したりする作業で記される。そのすべてを挙げるわけにはいかないが、代表的なものは次のとおりである⁽²⁴⁾。

- 1) 連結文：主題が明示されていない、中立叙述のタイプ。

Je suis venu hier. (私は) 昨日来ました。

- 2) 分割文：一構成要素を通常的位置から移動させることによる主題化のタイプ。

Hier(,) je suis venu. 昨日のことでしたら、(私は) 来ました。

- 3) 分割文中で、代名詞による名詞の復元がなされているタイプ。

J'ai vu Paul. → *Paul, je l'ai vu.* ポールには、会いました。

J'ai vu Paul. → *Je l'ai vu, Paul.* 会いましたよ、ポールになら。

- 4) *c'est ... que (qui) ~. etc.* による抽出タイプ。

C'est Paul que j'ai vu. 私が会ったのはポールです。

- 5) 並置されている二つの連結文の二番目が第一の内部に挿入されたり、

連結文中の一要素が移動され、文中に挿入される挿入句タイプ。

Paul s'est trompé de route. C'est un distrait.

ポールは道を間違えました。うっかり者なんです。

→Paul, *c'est un distrait*. s'est trompé de route.

ポールは、うっかり者なので、道を間違えました。

Le train a eu du retard hier.

その列車は昨日遅れました。

→Le train, *hier*, a eu du retard.

その列車なら、昨日は、遅れましたよ。

連結文のイントネーション

連結文のテキストは、原則的に全部が新情報であるが、弱い主題が隠されていても、「主題」と「説述」の識別について、外顯的には何の標識もつけられていない。したがって、文脈や、その場のシチュエーションで見分けなければならない。その場合、表現アクセントで、あるいはイントネーションによる切片分割 (segmentation) で、主題や説述に識別標識がつけられることもあるが、書記テキストではわからない。

ここでは、中立叙述の連結文だけを問題にするが、このような文はごくまれで、例えば、次のような科学的発話を何の感情もまじえずに読む場合がそれに当たる。

L'eau bout à cent degrés. 水は百度で沸騰する。

これに類した幾つかの例文のイントネーションを図⁽²⁵⁾で示せば、次のようになる。

Il neige depuis midi.

正午から雪が降り続けている。



Il neige depuis midi.

L'eau bout à cent degrés.

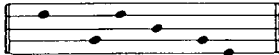
水は百度で沸騰する。



L'eau bout à cent degrés.

Paul s'arrête au troisième.

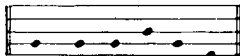
ポールは4階で立ち止まる。



Paul s'arrête au troisième.

C'est un amphithéâtre.

これは階段教室だ。



C'est un amphithéâtre.

Oui.

はい。



Oui.

このように、ごく限られた数の例から出発しても、断定文のイントネーションは、単純に「上昇部+下降部」から成り立っているのではないということがわかる⁽²⁶⁾。全部に共通しているのは、文末が低い調子で終わるということである。時としてそれに下降部が先行し、またそれ自体が上昇部に先行されることもある。

このように、もっとも単純な例で観察しても、イントネーションは比較的複雑な現われ方をする。実際、文が少し長くなると、意味単位(リズム・グループ)、感情の起伏などによる分割が起こり、それにつれてイントネーションも上昇、下降を繰り返すが、すべてについて言えるのは、途中で音声の断絶がなく、文はイントネーションの下降で終わる、ということだ

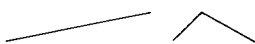
けである。

分割文のイントネーション

イントネーションが文を二つの部分に分割し、その一方が「主題」、他方が「説述」になるならば、イントネーションによる切片分割がなされたとされる。これを「イントネーションによる主題化」という。

- 1) 断定文なら、「説述」のイントネーションは、連結文のように下降で終わる。


- a) 「説述に前置された主題」は、上昇イントネーションで終わる。


Demain soir, il y sera.

主題 説述

明日の晩なら、彼はそこにいるでしょう。

- b) 「説述に後置された主題」のイントネーションは、低い一本調子で終わる。



Il y sera(,) demain soir.

説述 主題

彼はそこにいるでしょう、明日の晩は。

- 2) 疑問文なら、「説述」のイントネーションは、上昇で終わる。

- a) 「前置された主題」のイントネーションは、低く一本調子である。


Demain soir, il y sera?

主題 説述

明日の晩なら、彼はそこにいるでしょうか？

- b) 「後置された主題」は、高い一本調子で、最終音節が上昇して終わる。

Il y sera(,) *demain soir*?

説述

主題

彼はそこにいるでしょうか、明日の晩は？

イントネーションによる主題化，説述化

Le sous-préfet a reçu des fleurs.

副知事は花を受け取りました。

これは連結文で，外顯的には主題と説述を見分ける標識は何もついていない。したがって，中立叙述として発話され，イントネーションは次のようになる。

sans segmentation intonative



Le sous-préfet a reçu des fleurs.

こうしたテキストで，統辞上の主語 le sous-préfet をわざわざ主題に取り上げ，イントネーションで主題と説述に分割することは比較的古いものだが，ないわけではない。この場合，主題は上昇イントネーションで終わり，説述は断定文のイントネーションを取る。

Le sous-préfet | a reçu des fleurs.

主題

説述

副知事でしたら，花を受け取りました。

avec segmentation intonative



Le sous-préfet | a reçu des fleurs.

T

P.

しかし，上記のテキストを，イントネーションによって「説述＋主題」

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

に分割することは、よくある。そのとき、意味はほとんど、*C'est le sous-préfet qui a reçu des fleurs.*と同じになる。下記のテクスでは、対立を表すもう一つの説述が加えられ、二つの説述が上昇イントネーションで終わっているが、後置された主題は、低い単調なイントネーションになっている。なお、第二の説述が上昇イントネーションで終わっているのは、その後に当然続くべき同じ主題が省略されているためである。●の音符は、統辞形式からすれば連結文であるのに、分割文として発話するために、上昇イントネーションのあとの声帯閉鎖で少し音声が下降し、次につながるうとする勢いを表している。こうして、連結文の体面を維持しようとしているのである。

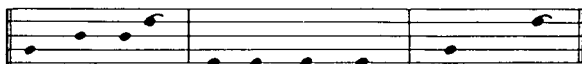
Le sous-préfet(,) | a reçu des fleurs, | pas le maire!

説述₁!

主題

説述₂!

副知事なのです、花を受け取ったのは、市長ではありません。



Le sous-préfet, | a reçu des fleurs, | pas le maire!

P. !

T

P₂ !

後置された主題と付加説明部 Thème postposé et épexégèse.

イントネーションは、「後置の主題」と「付加説明部」の区別もする。「付加説明部」⁽²⁷⁾とは、発話に後からつけ加えられた情報で、発話時の状況を説明する語(群)である。統辞文法的には、前の発話に組み込まれていっこうに差し支えない部分であるが、前文とは音声の休止によって分離されているので、イントネーションは比較的自律的である。⁽²⁸⁾

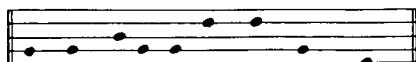
Je suis resté au lit toute la semaine.

これは、イントネーション次第で、

1) 連結文と解釈することもできるし、

Je suis resté au lit toute la semaine.

その週の間ずっと（病）床に就いていました。



Je suis resté au lit toute la semaine.

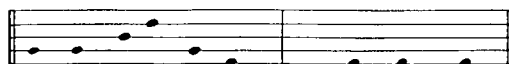
2) 分割文と取ることも、

Je suis resté au lit, | toute la semaine.

説述

主題

（病）床に就いていました、その週のあいだは。



Je suis resté au lit, | toute la semaine.

P.

T

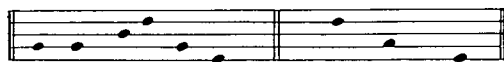
3) あるいはまた、二つの文に分割もできる。

Je suis resté au lit. | Toute la semaine.

説述

付加説明部

（病）床に就いていました。その週の間ずっとです。



Je suis resté au lit. | Toute la semaine.

P.

E.

この付加説明部のイントネーションは、連結文のそれに相当する部分と同じである。

分割されているテキスト Le texte segmenté.

統辞的に文が分割されていれば、それで主題化があることがはっきりわかる。そして、その文が実際に発話されるときに、その主題化をイントネーションが補いにやって来る。連結文 il aime les carottes. から出発して、その主語、直接補語、またはその二つを同時に分割することができる。その際、分割切片を代名詞で再現しなければならないが、語順に関してはい

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

いろいろな解決法がある。

Lui, il aime les carottes.

あの人は、ニンジンが好きなんです。

Il aime, lui, les carottes.

好きなんですよ、あの人は、ニンジンが。

Il aime les carottes, lui.

ニンジンが好きなんですよ、あの人は。

Les carottes, il les aime.

ニンジンなら、あの人は好きですよ。

Il les aime, les carottes.

あの人は好きですよ、ニンジンなら。

Lui, les carottes, il les aime. etc...

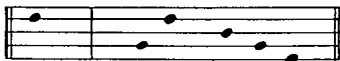
あの人なら、ニンジンは、好きですよ。

このような統辞形式であれば、「主題」と「説述」が組織的に分割されていることがわかるが、本当は、それだけで切片のどちらが「主題」になるか、「説述」になるかは必ずしも明らかでない（したがって例文に付けた訳は、解釈の一例にすぎない）。それを明確に示すのが、イントネーションの役割である。

Lui, il aime les carottes.

主題 説述

あの人は、ニンジンが好きなんです。



Lui, | il aime les carottes.

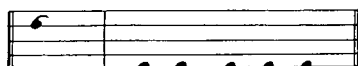
T

P.

Lui, | il aime les carottes!

説述！ 主題

あの人なんですよ、ニンジンが好きなのは！



Lui, | il aime les carottes !

P!

T

提示構文 C'est ... que (qui) ~ .etc. による抽出(extraction)

文中の一要素を抽出し、提示構文の C'est ... que (qui) ~ を使って、その要素を説述にする。こうした構文では、外顯的に主題と説述の識別ができ、したがってイントネーションも拘束することができると考えられる。しかし、ことはそう簡単ではない。

J'ai vu ça. のなかで、j'ai vu が主題であり、ça は説述であるという標識をつけるためには、C'est ça que j'ai vu. あるいは、Ce que j'ai vu, c'est ça. と言わなければならない。説述は、常に c'est ... の部分にある。

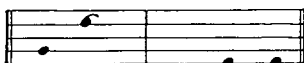
C'est ça que j'ai vu. は統辞形式からすれば連結文であるが、イントネーションは「説述＋後置主題」の分割文のそれになる。ここから、文形式とイントネーションの対立、抗争が産まれる。

C'est ça(,) | que j'ai vu.

説述

主題

それなんです、私が見たのは。



C'est ça, | que j'ai vu.

P.

T

Ce que j'ai vu, c'est ça. は、統辞形式上も、イントネーションも分割文である。

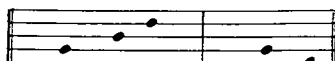
Ce que j'ai vu, | c'est ça.

主題

説述

私が見たものは、それなんです。

1. 主題と説述 thème et propos (杉山)



Ce que j'ai vu, | c'est ça.

T

P.

だからといって、前者の「c'est… + 関係代名詞」型の構文なら、なんでも「説述+後置主題」の範疇に入るかという、そうではない。関係代名詞で始まる関係節が、限定的関係節の場合もあるからである。次の文では、二つの解釈が可能である。

C'est le film que j'ai vu.

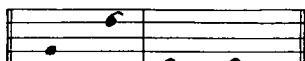
(連結文のイントネーションで) それは私が見た映画です。

(分割文のイントネーションで) 私が見たのはその映画です。

このような曖昧さは、次のような場合に消滅する。

- 1) C'est … que (qui) のあいだに固有名詞もしくは指呼詞 (déictique)

⁽²⁹⁾ が出てくれば、それらの辞項は限定節を受け入れない。したがって、その場合、必ず「説述+主題」の文になり、分割文のイントネーションで発話される。



intonation segmentée (P.T)

C'est *Paris* que je préfère.

僕が好きなのはパリです。

C'est *toi* que j'ai vu.

僕が会ったのは君だ。

C'est *demain* que j'irai.

僕が行くつもりになっているのは明日です。

C'est *ça* qu'il faut faire.

しなければならないのはそれだ。

- 2) これとは逆に、c'est … que (qui) ～ のあいだに置かれるのが指示代名詞 *ce*, *celui* の場合、それらは限定関係節を要求する。これは

中立叙述の文で、連結文のイントネーションを取る。



intonation liée (P.)

C'est *ce* que je vous disais.

それはあなたに申しあげたことです。

C'est *celui* que j'ai vu.

あれは私が会った人です。

挿入句 Les incises.

ある種の分割文は、「主題＋説述」、もしくは「説述＋主題」の順を取らずに、「説述」の内部に「主題」が挿入されている。

「挿入された主題」のイントネーションが、「前置された主題」のそれと同じなら、換言すれば、上昇で終わっていれば、挿入されているその主題は、「遅れて来た前置の主題」と言える。この場合は、聞き手の注意を「主題」につなぎとめる強調的機能を果たしている。

Je t' imagine, toi, avec une perruque.

説述₁ 主題 説述₂

想像しているんだ、君のこと、かつらをつけている姿をね。



Je t' imagine, | toi, | avec une perruque.

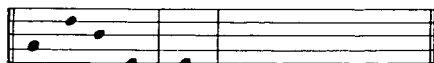
Pa | T | Pb.

逆に、「挿入された主題」のイントネーションが低い一本調子であるなら、「早すぎた後置の主題」と言えるだろう。この場合は、同時に avec une perruque の部分も主題になり、語調を和らげ、念を押す役割を果たしている。

Je t' imagine, toi, avec une perruque.

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

説述₁ 主題₁ 主題₂
 想像しているんだ、君の姿、かつらをつけている君の姿を。



Je t'imagines, | toi, | avec une perruque.

P. | T₁ | T₂

どちらのイントネーションを選ぶかは、話者次第である。

(続く)

註

- (1) énoncé の訳語。「言表」と訳されることもある。発話 (énoncé) とは、言語表現のうち、その言語を母語とする人々が完結していると認め、しかもそれに特有のイントネーションを伴う表現である。

日本語なら、(主語は明示されていなくても)「来た」は、「彼が来た」「君が来た」「～が来た」などの意味で用いられ、完結した発話である。

発話は独立して存在するのではなく、文字や口頭によるテキストの一部なのだから、テキスト全体は個々の発話の意味に当然影響する。(C. HAGÈGE: *La structure des langues*, p. 27, 33, 29. クロード・アジェージュ『言語構造と普遍性』p. 36, 42, 38)

- (2) アジェージュは、「発話がどのように組織されているかを知らうとするならば、3つの視点を導入する必要がある」と言って、イ) 形態統語的 (morphosyntaxique) 視点、ロ) 意味と指示の視点、ハ) 階層の視点、を挙げている。これは、大筋で、文法、論理、心理のレベルに相当する。(C. HAGÈGE: op. cit. p. 27. クロード・アジェージュ『言語構造と普遍性』p36-79)
- (3) prédicat の訳語である。伝統的な観念に従うと、「述部」は主語について語っている内容を示し、主語以外のものすべてが述部ということになる。(C. HAGÈGE: op. cit. p. 32-33)

- (4) 「主題」thème, 「説述」propos の訳語は、川本茂雄氏(『フランス語統辞法』p. 14)のものである。

もともとは、Charles BALLY が「心理的主語」*sujet psychologique*, 「心理的説述」*prédicat psychologique* を指すのに使った用語である。

その後、HAGÈGE は、同じ概念を表すのに「発話は、何を述べているか[rhème]と、何についてそれが述べられているか[thème]に分けられる」(op. cit. p. 31. 上掲訳書 p. 39-40)と言って、thème と rhème という用語を使っている。rhème の訳語には、「レーマ」(『ラールス言語学用語辞典』、『言語構造と普遍性』)、「題述」(泉邦寿著『フランス語、意味の散策』p. 169.)などが使われている。

R. L. WAGNER et J. PINCHON : *Grammaire du français* (Hachette, 1962) では、「説述」の意味で、*prédicat* を使っている。

更に同じ概念を、変形生成文法では、英語の topic-comment 「話題 - 評言」(『新言語学辞典』、『ラールス言語学用語辞典』)と言う。

なお、国語学者の間では、「主題とその解説」という用語が使われていて(金田一春彦『日本語はどんな言葉か』[『日本語の姿』 日本語講座第一巻 p. 33.] 大修館書店)、これが一番わかりやすいと思われるが、「その(=主題の)解説」のそのがないと座りが悪いような気がする。

- (5) アジェージュは、「レーマというのは、フランス語の *il reste le livre en question* (問題の本が残っている) からもわかるように、必ずしも新しい情報を示すというわけではない。しかし、どの発話でも、レーマの部分のほうがテーマよりも情報量が多い」と書いている。(C. HAGÈGE : op. cit. p. 25. 上掲訳書, p. 62)

なお、非人称構文 *il reste* に続く論理的主語名詞の定冠詞について、朝倉季雄氏は「存在の持続を表す *rester*, 非存在を表す *manquer* には、(実主語) 名詞限定辞の制限はなく、承前定冠詞・指示形容詞・所有形容詞・固有名詞も可能である」と書いている。(『フランス文法論』p. 101)

- (6) C. HAGÈGE : op. cit. p. 97. アジェージュ : 上掲訳書 p. 111.
(7) 三宅 鴻『代名詞的表現』のなかの、特に「ワタンとアナタ」(『日本語の語彙と表現』[日本語講座第四巻] p. 213-320. 大修館書店 1990) および川本茂雄『日本語の文法の特徴』(『日本語の姿』[日本語講座第一巻] p. 62. 同上)

ただし、朝日新聞に連載されている『いま東京語は』(1992年10月14日, p. 26)には、「四十代以上の人が「彼氏」という時、「かれし」と頭の部分

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

が高く発音され、特定の人の恋人に近い使われ方をした。今の若い女性には、男友達一般の意味で使われ、単なる三人称として会話に登場する。その際、アクセントは「かれし」と平板化している」と書かれている。これが現状なのであろう。しかしまた、「彼氏」と「彼」とは違うのかもしれないとも思う。「彼女」のほうの現状は、どうなのであろうか？

- (8) phrase liée も Charles BALLY の用語である。川本氏はこれに「連結文」という訳語を当てた。
- (9) 機能 fonction. ある辞項（音素、形態素、語、連辞など）が発話の文法構造全体の中で果たす役割を「機能」と呼ぶが、同じ観点から、文を構成する各部も、文の全体的意味に参加しているものと考えられ、それぞれ、機能を持っているとされる。このような観点からすれば、文の基本的な諸関係を決定するものとしての主語機能と術語機能、および他の辞項の意味の不足を補うための辞項（限定補語）が果たす補足機能（補語機能）が区別される。例えば、Pierre lit un livre. 「ピエールは本を読んでいる」という文の中では、livre 「本」という語が目的補語の機能を果たしている。（『ラールス言語学用辞典』p. 73.）
- (10) phrase segmentée も Charles BALLY の用語で、川本氏はこれに「断絶文」の訳語を当てたが、ここでは「分割文」とする。
- (11) 「動詞を除く」と書いたが、主語・動詞だけで、補語のつかない最小発話 énoncé minimal であれば、前置詞 pour を使って、動詞を「主題」にすることができる。

Ça roule. → Pour rouler, ça roule. 走るといえば、これはよく走る。

(C. HAGÈGE : op. cit. p. 53 アジェージュ : 上掲訳書, p. 62.)

属詞形容詞の場合は、pour を使わなくても「主題」にすることができる。

Il est honnête. → Honnête, il l'est. 正直といえ、彼はそのものだ。

= Pour honnête, il l'est.

= Si quelqu'un est honnête, c'est lui.

(Ch. BALLY : op. cit. p. 66)

- (12) 「辞項」は terme の訳語。terme は数学用語として用いられると、数式の各部分や級数の各数などを表す「項」の意味で、言語学（文法）用語としては、主に「文中で特定の機能をになう語（群）」（『ラールス言語学用語辞典』p. 186）という意味である。
- (13) left dislocation (英語) の訳語。Ross の用語で、文中から一要素を取り出して、文頭に位置させ、それを主題化するときの、左方（＝文頭）への移

転を言う。例えば, Mary will never marry Schwarz. → Schwarz, Mary will never marry him. のように, 主題化した名詞は代名詞で復元する。復元の代名詞を使わないやり方, 例えば, Lily bought the book. → The book, Lily bought. のごときは, 主題化変形 Topicalization と言う。(安井稔編『新言語学辞典』p. 237)

この用語は, 泉邦寿氏も『フランス語, 意味の散策』(大修館) p. 167 のなかで使っている。

- (14) 川本茂雄氏『言語の構造』I. 統辞論(白水社) p. 33-147.
- (15) 三上 章『日本語の論理』(くろしお出版) p. 78. p. 105. p. 106.
- (16) 三上 章『現代語法序説』(くろしお出版) p. 325-327.
- (17) Charles BALLY: *Linguistique générale et linguistique française*. p. 66.
- (18) right dislocation (英語) の訳語。left dislocation と同じく, Ross の用語。
たとえば, *The cops spoke to the janitor about that robbery yesterday.*
のような構造から, *They spoke to the janitor about that robbery yesterday, the cops.* のような構造を導く変形規則。(安井稔編『新言語学辞典』p. 398)
- (19) H. BONNARD: *Grammaire française des lycées et collèges*. (Classique SUDEL], p. 164.
- (20) Ch. BALLY: op. cit. p. 63.
- (21) Michel MARTINS-BALTAR: *De l'énoncé à l'énonciation* のなかで使われている用語である。通常は, このアクセントの性質を表す accent tonique 「強さアクセント」あるいは accent d'intensité 「強勢アクセント」が使われ, 機能を表す場合には accent rythmique 「リズム・アクセント」が使われる。cf. Maurice GRAMMONT: *Traité de phonétique*. Pierre FOUCHÉ はこれを, accent normal 「標準アクセント」と名づけている。cf. *Traité de prononciation française*, p. LVIII. 「統辞アクセント」は機能面からの用語で, 同じものを Jean MAZALEYRAT は accent grammatical 「文法アクセント」と呼んでいる(詩句のなかでは, 「リズム・アクセント」と「文法アクセント」は必ずしも一致しない)。cf. J. MAZALEYRAT: *Éléments de métrique française*, p. 114-116.
- (22) 一般的に accent d'insistance 「強調アクセント」と呼ばれているもので, P. FOUCHÉ はすでに, これを accent intellectif 「知的アクセント」と accent affectif 「感情アクセント」の二種類に分類している。op. cit. p. LVIII. MAZALEYRAT はこれを accent oratoire 「弁論アクセント」と呼び, やはり

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

「知的」と「感情的」の二つに分類している。op. cit. p. 112.

- (23) Ch. BALLY : op. cit. p. 64.

アジェージュも次のような例を挙げている。

Je pensais qu'elle y serait.

私は彼女がそこにいるだろうと思っていた。

という文は、イントネーション曲線が連結文調（中音程継続調＋音程の音声的な降下を伴う終止調）であれば、「しかし、彼女はそこにいない」、分割文調（終止調＋低音程の平坦な付加調）であれば、「彼女は確かにそこにいる」のように違った意味になる。2 番目の場合は「レーマ (je pensais) ＋テーマ (qu'elle y serait)」という切り方になるが、これは統辞的分析とは非常に異なっている。(HAGÈGE : op. cit. p. 53. 上掲訳書 p. 62)

なお、文法的解釈については、Kr. SANDFELD : *Syntaxe du français moderne. Les propositions subordonnées*, p. 261-262 や、川本茂雄『フランス語統辞法』p. 239 を参照せよ。

- (24) Michel MARTINS-BALTAR : *De l'énoncé à l'énonciation*, p. 19.

- (25) 以後に挙げる、イントネーション曲線を音符で示した図は、すべて Michel MARTINS-BALTAR : *De l'énoncé à l'énonciation* からの借用である。

- (26) 「通常のフランス文は、常に二つの部分から構成され、その初めの部分は上昇部、後の部分は下降部である」cf. M. GRAMMONT : *Traité pratique de Prononciation française* (Delagrave, 1920) p. 151.

- (27) épexégèse は、ふつう「同格部」と訳され (『ラールス言語学用語辞典』p. 295), 「一つの語と同格に置かれた語群や節（特に関係節）を同格部と呼ぶ。例えば, Marseille, qui est le chef-lieu des Bouches-du-Rhône, a vu son trafic s'accroître. (ブーシュ・デュ・ローヌの県庁所在地であるマルセイユでは交通が増大した) における関係節がそれである」と説明されているが、ここでいう épexégèse はもっと狭い意味で、Ch. BALLY の説明では「後から付け加えられた補足・説明を目的とする（前置詞のついた、あるいはそれと同じ意味の）語群」(op. cit. p. 59) とある。それゆえ、「付加説明部」と訳しておいた。

- (28) 指呼詞 déictique 発話はすべて、時間的・空間的座標で示される状況の中で実現される。話し手は、発話行為の時点や、そのコミュニケーションの参加者や、発話が産出される場所に、自分の発話を指向させる。この状況への指向が「指呼」deixis を形成する。発話を「位置付ける」ために力を貸す言語要素が指呼詞である。(後略) (『ラールス言語学用語辞典』,

p. 185)

具体的には、1) 人称代名詞、2) ce, celui を除く指示代名詞、指示形容詞 3) 「今日」aujourd'hui を中心とする時の副詞 4) 「ここ」ici を中心とする場所の副詞、など。(BALLY, ops. cit. § 125, p. 85-86)

参考文献

辞典類

Dictionnaire linguistique, par J. DUBOIS, L. GUESPIN, M. GIACOMO, Chr. et J. B. MARCELLESI et J.-P. MÉVEL (Larousse, 1973)

『ラールス言語学用語辞典』(大修館書店, 1980)

『新言語学辞典』改定増補版, 安井 稔編(研究社, 1975)

言語学, 文法

BALLY (Charles) : *Linguistique général et linguistique française*, 4^e édition revue et corrigée [Édition Francke Berne, 1965]

BLANCHE-BENVENISTE (Claire) : *Le français parlé, études grammaticales* [Editions du CNRS, 1991]

BONNARD (H.) : *Grammaire française des lycéens et collèges* [SUDEL, 1950]

FOUCHÉ (Pierre) : *Traité de Prononciation française* [Klincksieck, 1969]

Grammaire Larousse du français contemporain, par Jean-Claude CHEVALIER, Claire BLANCHE-BENVENISTE, Michel ARRIVÉ et Jean PEYTARD. [Larousse, 1964]

GRAMMONT (Maurice) : *Traité pratique de Prononciation française* [Delagrave, 1920]

GRAMMONT (Maurice) : *Traité de phonétique* [Delagrave, 1965]

HAGÈGE (Claude) : *La structure des langues* [PUF, Col. « Que sais-je? » 1986] アジェージュ (クロード)『言語構造と普遍性』(東郷雄二, 春木仁孝, 藤村逸子訳) (白水社, 1990)

MARTINS-BALTAR (Michel) : *De l'énoncé à l'énonciation* [Didier, Collection Civic, 1977]

MAZALEYRAT (Jean) : *Éléments de métrique française* [Armand Colin, 1974] マザレラ(J.)『フランス詩法, リズムと構造』(海出版社, 1980)

SANFELD (Kr.) : *Syntaxe du français contemporain, II. les propositions subordonnées* [Droz, 1965]

WAGNER (R. L.) et PINCHON (J.) : *Grammaire du français* [Hachette, 1962]

I. 主題と説述 thème et propos (杉山)

日本語文献

奥津敬一郎『「ボクハウナギダ」の文法、一ダとノー』(くろしお出版, 1990)

大修館「日本語講座」1 金田一春編『日本語の姿』(大修館書店, 1990)

4 鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現』(同上)

三上 章『現代語法序説, シンタクスの試み』(くろしお出版, 1987)

『日本語の論理』(くろしお出版, 1989)

『象は鼻が長い』(くろしお出版, 1990)

『文法小論集』(くろしお出版, 1987)

朝倉季雄『フランス文法覚え書き』(白水社, 1967)

『フランス文法ノート — 基本語の用法』(白水社, 1981)

『フランス文法メモ — 基本語の用法』(白水社, 1984)

『フランス文法論』(白水社, 1988)

泉 邦寿『フランス語を考える20章 —意味の世界—』(白水社, 1978)

『フランス語, 意味の散策, 日・仏表現の比較』(大修館書店, 1989)

川本茂雄『フランス語統辞法』(白水社, 1982)

『言語の構造 — フランス語そのほか』(白水社, 1985)

西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』(世界思想社, 1986)

丸山圭三郎『ソシュールの思想』(岩波書店, 1981)

(フランス文学科 教授)